

【研究ノート】

大学生を対象としたデジタル・ネイティブと自己との関連

宇恵 弘*

Relationships between Digital Natives and Self for the University Students

Hiroshi Ue

要 旨

本研究の目的は、デジタル・ネイティブ世代の学生の様相を、自己愛傾向と自己理解との関連から考察することであった。研究対象者は大学生262名であり、3種類の質問紙に回答を求め分析をした。その結果、デジタル・ネイティブの程度と自己愛傾向との間に関連がみられたが、自己理解との間には関連がみられなかった。

Abstract

The purpose of this study was to examine relations among Digital Natives, narcissistic personality and construal of self. Three kinds of questionnaires were administered to 262 university students. The result indicated that the degree of Digital Natives had relations with narcissistic personality, whereas not with construal of self.

● ● ○ **Key words** デジタル・ネイティブ digital natives / 自己愛傾向 narcissistic personality / 自己理解 construal of self

問題

デジタル・ネイティブ (digital natives) という言葉は Prensky によって紹介された (Prensky, 2001a, 2001b)。デジタル・ネイティブとは、生まれた時から、パソコンやインターネット、携帯電話、携帯ゲーム機器などの情報機器や通信機器に囲まれて育ち、その使用にも慣れている世代である。研究者によって10年程の相違はあるものの、その年代層は1990年以降に生まれた人々を指している。

三村・倉又 (2009) は番組制作の情報を得るために、ハーバード大学ロースクールにおいてデジタル・ネ

ィブの研究に携わっている John Palfrey 氏取材した。その中で、Palfrey 氏はデジタル・ネイティブの特徴として、(1) インターネットの世界と現実の世界を区別しない、(2) 情報は、無料だと考えている、さらに条件付きながら (3) インターネット上のフラットな関係になじんでいるため、相手の地位や年齢、所属などにこだわらない、の3点を挙げている。

本邦では、高橋・本田・寺島 (2008) が、デジタル世代の大学生を対象として、彼らが日常生活において遂行している社会的相互作用やそれを通じて構築している他者との関係性を検証している。具体的には、インターネット・リテラシー尺度 (IL 尺度) を作成し、

受付日 2011.9.14 / 受理日 2011.10.26

* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

携帯電話の利用方法や、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の利用方法などとの関連を調べている。デジタル・ネイティブ度の近似的な指標として考えられる IL 尺度との相関分析の結果、デジタル・ネイティブ度の高い学生は、携帯電話でも積極的にインターネットを利用することや、特に女性に携帯電話への心理的依存の傾向がみられること、さらに SNS の利用に関しては、日記・コミュニティからさまざまな情報を得る、寂しいときに利用するなどを報告している。

廣瀬（2009）は、デジタルネイティブと呼ばれる世代の学生たちに合った授業を展開するために、学生のデジタルネイティブ度を調べるための基礎調査を行った。三村・倉又（2009）による「デジタルネイティブ度チェック」を大学生に実施し、デジタルネイティブ度を測定する項目の特定を行った。また、項目の反応を学年によって調べた結果、低学年程デジタルネイティブ度が高い傾向を示す項目がみられたと報告している。

さて、現時点で大学に在籍している学生はまさにデジタル・ネイティブと言われる世代の若者である。彼らの性質をこのデジタル・ネイティブという概念から捉えてみようと考えたのが本研究の目的である。本研究では特に、自己愛傾向や自己理解との関連から、デジタル・ネイティブについて検討を進めた。

青年期の自己愛傾向とは、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求が特徴である、と小塩（1998b）は述べている。デジタル・ネイティブ世代の若者は、先に述べた Palfrey の挙げた特徴から、相手の地位や年齢、所属などにこだわりがなく、相手と対等な人間関係を望むが、その一方でその関係は表面的であり、自分自身への関心が強く、他者に対する尊敬も低いなど、小塩（1998b）の言う自己愛傾向も強いのではないかと予想した。

自己理解には、独立的な理解の仕方と相互依存的な理解の仕方が指摘されている。木内（1996）によると、独立的自己理解とは、自己を他から切り離されたものと理解することであり、かつ、自己の中の誇るべき属性を見出し、表現していく主体と見ることである。一方、相互依存的自己理解とは、自己を他の人々と根本的に結びついていると理解することであり、かつ、特定の他者との協調的でもちつもたれつな関係を、維持

し、実現させていく主体と見ることである。前者は、欧米の文化において典型的であり、後者は日本を含む東洋の文化において多くみられると述べられている。

さて、デジタル・ネイティブには、独立的自己理解をする者と、相互依存的自己理解をする者のどちらが多いのだろうか。インターネット上のフラットな関係になじんでいるため、相手の地位や年齢、所属などにこだわらない、というデジタル・ネイティブの特徴（三村・倉又、2009）から考えると、他者とは異なる個別存在であると自己を理解し、しっかりと自己を確立しているのだろうか、あるいは、ブログや SNS などのコミュニケーションツールの広がりや、他者とのつながりを大切にするという点で、社会的存在として自己を理解し、他者と相互依存的な関係を築いているのだろうか。

方法

調査時期・場所

2010年12月と2011年7月、大学の授業時間内に配布回収をした。

調査対象者

関西の4年制私立大学の学生262名（12月：167名、7月：95名）を対象とした。男子学生75名（12月：42名、7月：33名）、女子学生187名（12月：125名、7月：62名）名、平均年齢 20.4 ± 1.0 歳（12月： 20.9 ± 0.7 歳、7月： 19.7 ± 1.1 歳）であった。

手続き

調査内容は、デジタル・ネイティブ度測定尺度、自己愛人格目録（小塩、1998a）、独立・相互依存的自己理解尺度（木内、1995）の3種類であった。

(1) デジタル・ネイティブ度測定尺度（以下、DNS: Digital Natives Scale）

三村・倉又（2009）に掲載されている「デジタル・ネイティブ度チェック」を一部修正し使用した。このチェック項目に対しては「学術的に厳密なものではない」（三村・倉又、2009, p.114）と述べられているが、彼らがテレビ番組作成のために取材した人々の行動から作り出した項目であることから、内容的妥当性を満たしていると考えられたので、本研究で使用することとした。しかし、項目を検討した結果、尋ね方や選択

肢などに不適当な点がみられた。そこで、3項目(項目4、12、19)について質問の意図を曲げない程度に内容を変更し、選択肢は「はい」「いいえ」の2件法から「当てはまる」「どちらともいえない」「当てはまらない」の3件法に変更して、調査に使用した。尺度の合計得点が高い場合に、デジタル・ネイティブ度が高いことを示す。

(2) 自己愛人格目録 (以下、NPI)

小塩 (1998a) によって作成された自己愛傾向を測定する尺度である。今回使用した項目はその短縮版であり、30項目からなり、5件法で回答する。下位因子としては、「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」の3つの因子から構成されている。この尺度は、正常な人格特性としての自己愛傾向を測定する目的で作成されており、自尊感情との間に正の相関関係があり、広く浅い友人関係との間にも正の相関関係が報告されている。尺度得点が高い場合に自己愛傾向が高いことを示す。

(3) 独立・相互依存的自己理解尺度 (以下、SII)

木内 (1995) によって作成された尺度である。16項目からなり、4件法で回答する。この尺度は、独立的な自己理解と相互依存的な自己理解から、社会的行動の個人差を調べるために作成された尺度である。木内 (1996) では、対人不安感や自尊心など人格特性との関連が示されている。尺度得点が高い場合に相互依存的自己理解が優勢であり、低い場合は独立的自己理解が優勢となる。

結果

(1) DNS について

各項目の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。選択肢(「当てはまる」と「当てはまらない」のいずれか)に80%以上の偏りのみられた項目は、項目1、11、13、16、20の5項目であった。項目16を除き「当てはまらない」の回答が多かった。なお、12月と7月の資料を比較分析した結果、項目16の項目平均値にのみ12月(平均値2.8)と7月(平均値2.6)との間に統計的な差がみられた。しかし、項目16の平均値の差が小さいこと、差がみられたのが20項目の内1項目だけであったことから、本研究では12月と7月の資料を合わせて分析を

することとした。

「当てはまる」を3点、「どちらともいえない」を2点、「当てはまらない」を1点として合計得点を求めた。合計得点の平均値は35.76、標準偏差は6.21、範囲22～55であった。廣瀬 (2009) と同様に、性別による合計得点の平均値に統計的な差はみられなかった(男子学生 34.87 ± 5.97 、女子学生 36.13 ± 6.28 、 $t(257) = -1.48, ns$)。

Table 1 デジタルネイティブ尺度の項目と平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
1 インターネットを知り合いになって、会ったことのある人が5人以上いる。	1.29	0.69
2 朝起きると最初にするのは、メールをチェックすることだ。	1.96	0.91
3 出かけたり、買い物をしたり、何か行動する場合は、まずネットで検索する。	1.94	0.81
4 デジカメなどで撮影した写真は、写真共有サイト(Picasaウェブアルバムやフォト蔵など)にアップロードしている。	1.41	0.72
5 ネットで買い物をするときに、クレジットカード番号を入力することにまったく抵抗がない。	1.27	0.58
6 音楽は、ネットで購入したり、入手することが当たり前になっている。	1.58	0.84
7 定期的にチェックするブログが5つ以上ある。	1.94	0.96
8 ブログにコメントを付けたことがある。	2.47	0.87
9 自分のブログをもっていて、定期的に更新したり、トラックバックを張ったりしている。	1.90	0.94
10 mixiやFacebookなどのSNSに複数参加している。	2.06	0.93
11 SNSでは自らコミュニティを主宰している。	1.13	0.45
12 ウィキペディアを利用することが多い。	2.18	0.89
13 インスタントメッセージで友人と日常的にチャットする。	1.27	0.62
14 携帯電話は会話するよりも、メールすることのほうが圧倒的に多い。	2.47	0.75
15 面白い動画やサイトを、すぐに友人にメールなどで知らせることが楽しい。	1.56	0.82
16 友人、知り合いに電話番号を教えるときは、携帯電話の赤外線通信で行う。	2.76	0.59
17 ネットでニュースをフォローしているので、紙の新聞は読まない。	1.89	0.83
18 テレビはいったん、ハードディスクレコーダーに録画してから見るのが基本だ。	1.57	0.79
19 学校(小学校、中学校、高等学校)では、パソコンの授業が苦手だった。	1.97	0.90
20 いまの彼女(彼氏)はネットで知り合った。	1.11	0.43

注: 項目19は逆転項目

(2) DNS と NPI、ならびに SII との関連

DNS を独立変数、NPI、SII の合計得点を従属変数として、一元配置の分散分析を行った。DNS は便宜的に4つの群を作り独立変数とした (Table 2)。その結果、NPI の「自己主張性」に有意な主効果 ($F(3, 118) = 4.44, p < .01$)、 「注目・賞賛欲求」に有意傾向が

みられた ($F(3, 118) = 2.46, p < .10$)。下位検定 (Tukey法、 $p < .05$) の結果、「注目・賞賛欲求」は LL 群 (平均値 27.2) よりも HH 群 (平均値 33.2) の得点が高く、「自己主張性」は L 群 (平均値 26.7) よりも H 群 (平均値 32.0)、HH 群 (平均値 31.4) の得点が高かった (Table 3)。

Table 2 DNS の合計得点によるグループ分け

LL群	DNSの合計が22以上27以下、対象者の約10%
L群	DNSの合計が28以上30以下、対象者の約15%
H群	DNSの合計が41以上43以下、対象者の約15%
HH群	DNSの合計が44以上55以下、対象者の約10%

Table 3 DNS の4群別、NPI と S I I の平均値と標準偏差

従属変数	独立変数	平均値	標準偏差	小塩 (1998a) 木内 (1995) の統計量	
				平均値	標準偏差
注目・賞賛欲求 [†]	LL群	27.3	8.4	31.6	6.7
	L群	28.9	7.8		
	H群	28.8	8.2		
	HH群	33.2	8.7		
優越感と有能感	LL群	24.2	9.6	29.9	6.3
	L群	22.3	7.6		
	H群	24.4	8.6		
	HH群	23.9	7.3		
自己主張性**	LL群	30.4	8.3	25.8	5.8
	L群	26.8	5.4		
	H群	32.1	7.4		
	HH群	31.4	5.7		
自己愛合計	LL群	81.9	23.0	87.3	14.3
	L群	78.1	17.7		
	H群	85.2	20.5		
	HH群	88.6	16.4		
独立・相互依存的自己理解	LL群	42.8	8.6	38.6(♂)	7.1
	L群	45.9	7.3		
	H群	43.5	5.8	41.1(♀)	6.7
	HH群	45.2	6.8		

考察

(1) デジタル・ネイティブ度測定尺度について

最初に、回答に偏りのみられた項目について考察をする。

廣瀬 (2009) では回答に偏りのみられた項目は7つであったが、本研究では5つという結果であった。項目4、12、19の3項目については、回答に偏りはみられず尋ね方を工夫した効果が示された。

廣瀬 (2009) と同様に、項目1「インターネットで知り合いになって、会ったことのある人が5人以上いる」、項目11「SNS では自らコミュニティを主宰している」、項目20「いまの彼女 (彼氏) はネットで知り合った」の3項目の選択率が少なかった。項目1と20については、本研究と廣瀬 (2009) とともに選択率が10%前後であり、デジタル・ネイティブ世代の学生と言えども、インターネットを利用して具体的な人間関係を広げるケースはまだ少ないと思われる。しかし逆

に、この結果は、10%前後の学生がインターネットで知り合った人と友人関係を広げていることも示している。自ら SNS のコミュニティを主宰している学生も少ないが、ブログや SNS の利用は学年が下がるに従って増加することも報告されている (廣瀬, 2009) ことから、今後、インターネットを利用した友人関係の広がり可能性が予想される。

次に、項目の分析について述べる。廣瀬 (2009) の結果では、項目分析の過程に問題も見受けられるが、項目反応理論による項目の識別力を検討した結果60% (20項目中12項目) の項目に高い識別力が示されている。一方、本研究では、回答への偏りが大きい項目がみられたことから項目の詳細な分析は行わなかった。尺度の信頼性と妥当性に問題は残されたが、尺度全体のまとまりも大切であり、各項目への反応を含め継続的に分析することによって「デジタル・ネイティブ」の様相や変化が把握できるのではないだろうか。また、元来、学術的に厳密なものではない (三村・

倉又, 2009) とは言え、綿密な取材の後に案出された項目であることから、今後も尺度や項目を検討し続ける価値はあると考えている。

(2) デジタル・ネイティブ度測定尺度と自己愛人格目録、ならびに独立・相互依存的自己理解尺度との関連
本研究の結果では、デジタル・ネイティブ尺度と、自己愛人格目録の下位因子「注目・賞賛欲求」「自己主張性」との間に統計的に有意な結果がみられたが、独立・相互依存的自己理解尺度との間には統計的に有意な結果はみられなかった。

本研究での調査対象者は全員デジタル世代の学生と考えられるが、高橋ら (2008) によるとデジタル世代もまた、デジタル実践者である「デジタル・ネイティブ」と非デジタル実践者である「デジタル異邦人」に分けることができる。本研究ではデジタル・ネイティブ尺度の合計得点から便宜的に4つ群に分けて分析したが、HH群やH群などの高得点群は、高橋ら (2008) の言う「デジタル・ネイティブ」、LL群やL群などの低得点群は「デジタル異邦人」にそれぞれ対応すると考えられる。

すなわち、「デジタル・ネイティブ」と「デジタル異邦人」に分類される学生を比較すると、前者の方が後者よりも、周囲の人から注目や賞賛されたい気持ちや自分の意見をはっきり述べる傾向があると言える。この結果から、先に予想した、「デジタル・ネイティブ」は、対等でオープンな人間関係を望むが、その一方で、その関係は表面的であり、自分自身への関心が強く、他者に対する尊敬も低いという側面の一部が示されたのではないだろうか。

しかし、本研究での結果と小塩 (1998a) の結果とを比較すると (Table 3)、「注目・賞賛欲求」の考察には注意が必要である。「注目・賞賛欲求」全体の平均値は29.4であり、先行研究よりも平均値が高いのはHH群のみである。言い換えると、「デジタル・ネイティブ」の「注目・賞賛欲求」は確かに高いが、「デジタル異邦人」の「注目・賞賛欲求」がかなり低いことを示している。すなわち、本研究の結果からは、情報機器や通信機器を使わない、あるいは使いこなせていない「デジタル異邦人」は、周囲の人から注目や賞賛を求めることが少ないとも言えそうである。情報機器や通信機器は情報の交換や入手に利用されることが

多い。mixi や facebook などの SNS はその最たるものである。「デジタル異邦人」は積極的に情報の交換や入手をしなくても日常生活を快適に過ごすことができると考えると、「デジタル・ネイティブ」に比べ人との交流を少なく済ますことができ、その結果、周囲の人から注目や賞賛を求めることも少なくなるのではないだろうか。

「デジタル・ネイティブ」と独立的・相互依存的自己理解との間には統計的に有意な結果はみられなかった。本研究での独立・相互依存的自己理解尺度の尺度得点 (平均値44.6、標準偏差7.2) をみると、木内 (1995) の結果とくらべて平均値が高い (Table 3)。すなわち、本研究の対象者は、相互依存的な自己理解をしている者が多くを占めていたため、独立的な自己理解をしている者との比較ができなかったと考えられる。今後の課題としては、木内 (1996) のように、独立的な自己理解をする欧米在住経験のある日本人を対象に含めることが挙げられる。

引用文献

- 木内重紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 木内重紀 1996 独立・相互依存的自己理解—文化的影響、およびパーソナリティ特性との関連— 心理学研究, 67, 308-313.
- 小塩真司 1998a 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 45, 45-53.
- 小塩真司 1998b 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 高橋利枝・本田量久・寺島拓幸 2008 デジタル・ネイティブとオーディエンス・エンゲージメントに関する一考察—デジタル・メディアに関する大学生調査より— 立教大学応用社会学研究, 50, 71-92.
- 廣瀬英雄 2009 デジタルネイティブ度から見える九州工業大学の学生の傾向 2009九州PCカンファレンス.
- 三村忠史・倉又俊夫 2009 デジタルネイティブ—次代を変える若者たちの肖像— 日本放送出版協会.
- Prenkys, M. 2001a Digital natives, digital immigrants. On the Horizon, 9, 5, 1-6.
- Prenkys, M. 2001b Digital natives, digital immigrants, part II. Do they really think differently? On the Horizon, 9, 6, 1-6.